

五斗田遺跡

—発掘調査概報—



2 0 0 0

長岡市教育委員会

調査の経緯

五斗田遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業山北第三地区事業実施に伴って行った。五斗田遺跡の発見は、平成8年度の藤ヶ森遺跡の確認調査中に送電線の鉄塔付近から土師器などの土器が採集されたことによる。このため、長岡農地事務所と協議を行って稲刈り後に土師器採集付近の試掘調査を実施することにした。平成8年10月に遺跡所在を主目的とした試掘調査を行って約2万㎡におよぶ五斗田遺跡の存在を確認した。この試掘調査の資料を長岡農地事務所に提供して、五斗田遺跡の発掘調査面積をできるだけ少なくする方向で協議を重ねた。その結果、五斗田遺跡は約5400㎡を平成11年度に発掘して記録を保存し、残りは盛土などで保存すること、平成12年度に調査報告書を作成することで協議が整った。

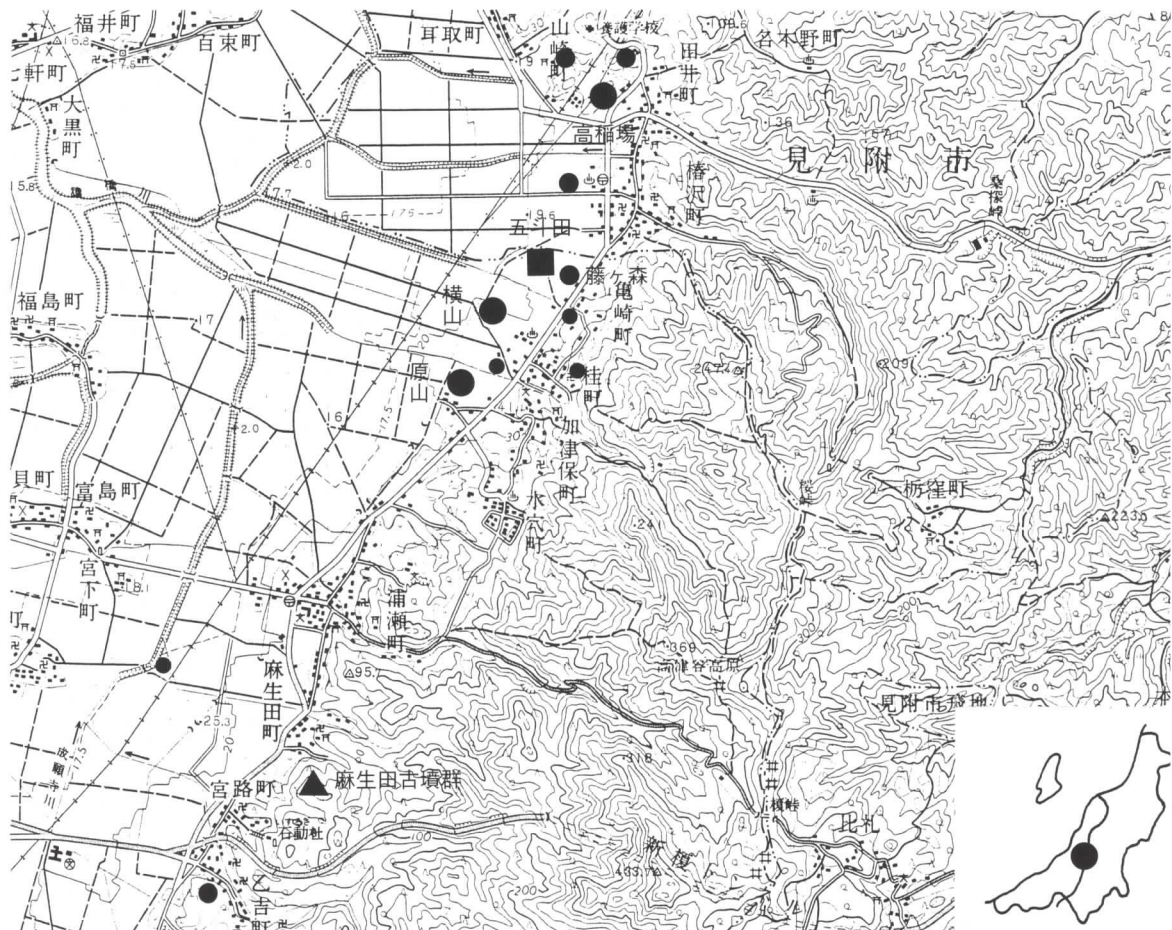


発掘スナップ



発掘スナップ

発掘調査は平成11年4月に新潟県長岡農地事務所と長岡市の間で発掘調査に関する費用負担契約を結び、発掘業務は指名競争入札で落札した株式会社大石組に委託して調査に入った。発掘は、5月下旬から表土の除去作業、調査事務所などの仮設工事を行うなど、6月2日までにベルトコンベア等の設置を行うなど人力による発掘の態勢が整い、3日から作業員を動員して発掘を開始した。表土除去作業中に包含層の中に根を張っている立木が10数本、葉っぱの化石が数カ所で、それに方形周溝などが包含層上面で検出されるなど、五斗田遺跡の特徴的なことがらがこの段階で確認された。11月中旬には発掘が終わり、12月中旬に埋め戻しが終了して現場での調査を終えた。



第1図 五斗田遺跡及び弥生遺跡 (●) 並びに古墳群 (▲) (1/50,000 長岡)

五斗田遺跡の位置とその周辺

五斗田遺跡は、長岡市の北東部で、北側の見附市と境を接する亀崎町に所在している。亀崎町を含む長岡市の山本地区は信濃川右岸にあって、栃尾市側との分水嶺をなす通称「東山丘陵」が南北に延びる山裾



遺跡遠景

にかけて開けた地域である。この山本地区は椿桂川、沢田川などの中小河川が西の沖積地に向かって東山丘陵から流れ、信濃川支流の猿橋川に流れている。そして、西の沖積地には「八丁沖」と呼ばれた低湿地帯が広がっている。また、東山丘陵からは尾根が北西方向に延び、さらには沖積地に取り残された小高い丘（残丘）が見られる。そこに弥生時代から古墳時代に遺跡

が多数所在している。第1図中にプロットした遺跡は、弥生遺跡では沖積地に突き出た尾根にある藤ヶ森や原山、尾根筋にある高稲場、残丘の横山遺跡など12ヶ所である。古墳時代は東山の中腹に位置する麻生田古墳群と五斗田の2ヶ所で確認されている。横山や高稲場は弥生後期の環濠集落で、藤ヶ森は南の丘に方形台状墓が2基確認された遺跡である。

五斗田遺跡は、東山丘陵から突き出た尾根が沖積地に没する付近に位置している。北西方向には弥彦山が望める。現況は水田、標高は約20mの沖積地である。尾根とは6mほどの標高差がある。



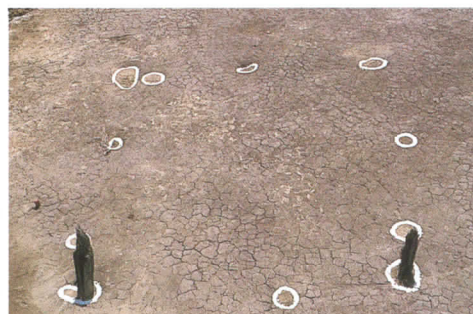
遺跡近景



第2図 五斗田遺跡及び藤ヶ森遺跡 (1/2500)

遺 構

遺物包含層は粘性がやや強い黒色土、地山は青灰色粘土であるが、それぞれ地山漸移層との境が明瞭でないところが多く、遺構の検出が困難であった。堅穴住居跡は検出されず、検出できた遺構の多くはピットであるが、遺物を伴わないものが多かった。その一方、木柱根を残す掘立柱建物跡2棟や、土器溜まりとみられる溝状遺構、覆土に炭化米を含むピット、方形状の高まりの周囲にやや不整形な溝を巡らしている「方形周溝状遺構」などを検出した。



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



ⅢB-P 2



木柱と礎板

第1号掘立柱建物跡 遺物包含層の上に厚さ約60～70cmの砂が堆積しており、その砂をバックホーで除去している際、Ⅲ・ⅣCにおいて直径20cmほどの木柱が2本、包含層の上に50cmほど突き出た状態で検出した。また、その周辺の包含層の上面で、砂が入っている直径約20cmのピットを何基か確認し、ピットの発掘によりさらに木柱1本を確認した。それらのピットと、木柱が入っているピットの平面規模や並びの角度から、4.9m×3.8mの1間×1間の掘立柱建物跡と推定される(第5図)。ピットから土師器片も出土したが、いずれも細片で、時期は不明である。

第2号掘立柱建物跡 ⅢB・Cにおいて、木柱根を伴うピット3基と伴わないピット1基が、建物の柱穴のように並び、2.5m×3.8mの1間×1間の掘立柱建物跡とした(第5図)。木柱の直径は約10～20cmで、第1号建物跡の木柱と比べると細い木柱であった。木柱以外に遺物は出土しなかった。

木柱根をもつピット 包含層上の砂を除去しているとき、第1号建物跡の場合と同じように、柱材と考えられる木材がⅢB-P1とⅢB-P2のそれぞれに1本ずつ立っている状態で出土した。掘立柱建物跡になる可能性から、周辺を精査したり、木柱根の有無や深さなどに注意しながらピット発掘を進めたが、周辺のピットは、木柱根をもつピットと比べると細いものや浅いものが多く、また、木柱やその痕跡を残すものも確認できず、掘立柱建物跡との推定はできなかった。

ⅢB-P2は、柱材の下に礎板が入っていた。礎板は直径22cm、厚さ約2cmで、直径は柱材の直径とほぼ同じである。ⅢB-P1とⅢB-P2との距離は約5mであるが、ⅢB-P1の柱材の下には礎板は入っていなかった。これは、P2の地盤が粘土質であったのに対し、P1の地盤は若干砂利が混ざっていて、礎板を必要としなかったためと思われる。

また、砂の除去作業中に、直径約20cm、長さ約1.5mの柱材と見られる木柱2本がⅢC付近でピットから抜けた状態で出土した。それらが入っていたピットは不明である。

土器溜まり（溝状遺構） III C-1・2 h・g の包含層発掘中、完形に近い状態のものも含む、比較的大きな土師器片がまとまって出土した。周辺を精査しながら発掘を進めた結果、溝状の遺構を検出し、その中に6～7個体の土師器が入った状態であることを確認した（第4図）。溝の規模は、遺構確認面において幅30～35cm、長さ2.8mで、確認面からの深さは15～20cmである。出土した土師器は、甕5個（第6図1・2）、壺1個（同図5）、器台2個（同図6）、有孔鉢1個（同図9）で、いずれも古墳時代前期の所産とみられる。

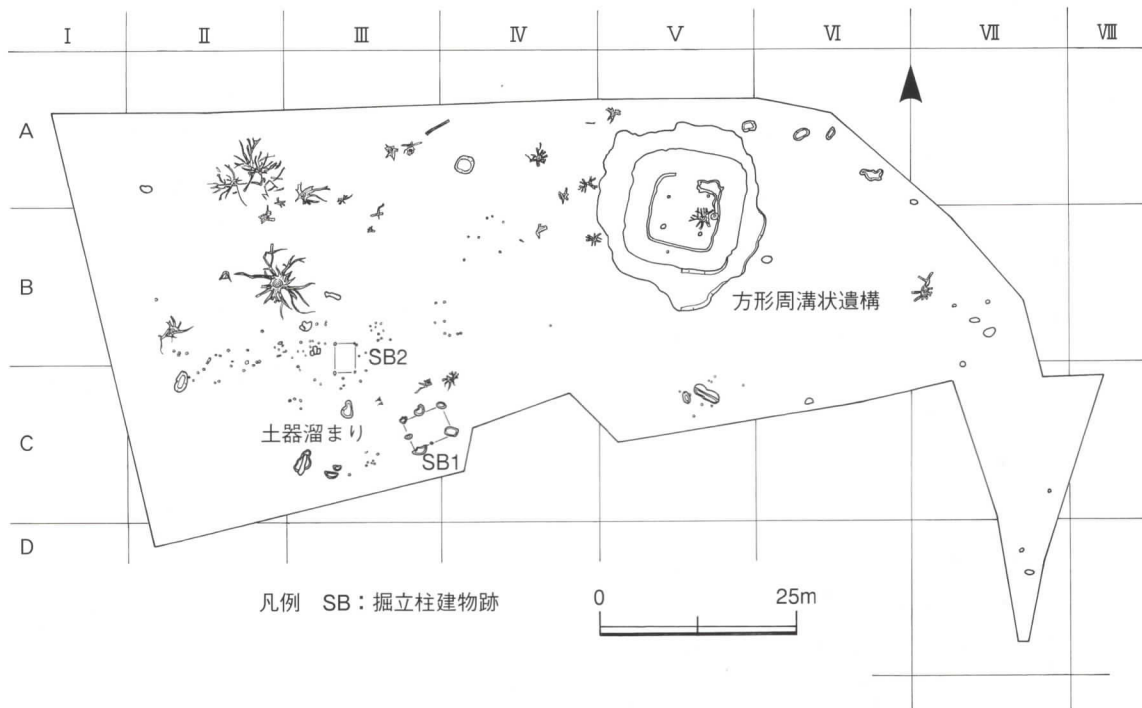


土器溜まり

VII B-P1 包含層発掘時、比較的大きな土師器片がややまとまって出土した範囲があり、その下を掘り進めていたときも大きめの土師器片が出土していた。遺構確認面のレベルにいたると、1.2m×1.5mのやや不整形な円形のピットを検出した（第5図）。遺構確認面からの深さは20cmである。朱塗りの二重口縁壺の口縁部片などを含む、古墳時代前期の土師器片が出土した。また、遺構確認時、覆土に多くの炭化材が含まれていることが確認され、形の残りがよいものや、やや大きめのものがピットの側面や底面に沿うような状態で出土した。さらに、覆土の発掘中に炭化米を確認したので、残りの覆土の水洗を行ったところ、合計68粒の炭化米が出土した。



VII B-P1



第3図 発掘調査区の遺構全体図（1/1000）



遺構検出状況



発掘スナップ



遺構全景



完掘状況

方形周溝状遺構 東西約15m×南北約15mの方形状の高まりの周囲にやや不整形な幅2～5mの溝が巡っている遺構で、その形状から「方形周溝状遺構」と呼称する。可能性としては方形周溝墓や、溝を巡らした何らかの祭祀遺構などが考えられるが、性格を決定づけるような遺構・遺物は確認できなかった。

遺物包含層の上の砂をバックホーで除去している際、遺物包含層の上面において、円形周溝墓の周溝が巡っているかのような状態で砂が堆積していた。砂を取り除いた時点で、直径約16mの円形または東西約16m×南北約16mの隅丸方形状の平坦面があり、その周囲に幅約2mの周溝が巡るようであることを確認した。また、その平坦面において約8.5m×約8.5mの方形に幅15cmほどの溝のような落ち込みが巡っていることも確認できた。その方形に巡る溝の内側の範囲に、葉や木の破片などを多く含む腐葉土のような黒色土が堆積していたが、方形に巡る溝よりも外の平坦面上では腐葉土のような黒色土はほとんど見られなかった。

土層観察用に東西方向と南北方向のベルトとサブトレンチを設定したところ、平坦面のほぼ中央にあたる部分で、腐葉土のような黒色土の下に厚さ1～2cmほどの炭化物を多く含む層があることが確認された。サブトレンチのため南北の範囲は不明であるが、東西では約2mの広がりを確認した。裁ち割りの結果、焼土は確認されなかった。

平坦面の方形に巡る溝の内側の掘り下げを行ったところ、中心部の炭化物と同じレベルに至ってピット4基を検出したが、柱穴となるかは不明である。3基からは遺物は出土せず、残る1基からは土師器の細片が出土したのみであった。

平坦面の中心からやや東よりの位置に立木根No.19があり、「方形周溝状遺構」との関連も考えられた。しかし、樹幹及び広がっていた根を撤去したところ、樹幹の東側に広がった根の下からピット1基を検出し、その可能性は低い。そのピットからは管玉1点と土師

器片が出土した。

周溝から土師器片が出土したが、特に東側の周溝の中から大量に出土した。個体としてまとまった状態のものはほとんどなく、復元困難なものが多いが、周溝の底に近い位置で出土したものはやや大きめの土師器片もあった。土師器片の年代は古墳時代前期とみられる。

IVA-P1 直径約2.4m、深さ55cmの円形のピットである。底面に広葉樹の葉を敷いたようになっていた。



IVA-P1

VIC-P1 排水溝で南側が削られてしまったピットである。残存部で、東西径約1m、深さ22cmで、古墳時代前期のものとみられる土師器片を出土した。



VIC-P1

立木根 厳密には遺構ではないが、遺物包含層において樹木の根が多く出土し、樹幹のあるものが23本確認された。立木根の多くはⅠ・Ⅱ・Ⅲ区から出土しており、東の方の調査区ではあまり出土しなかった。遺跡と同時代のものであれば「屋敷林」のようなものの可能性も考えられる。しかし、根が張っているレベルと土師器片の出土レベルとは差がなく、根と根の間に土師器片が挟まったような状態での出土も多い。また、「方形周溝状遺構」の平坦面では、立木根No.19の下にピットが確認されたことから、立木根が遺構の構築年代よりも新しい時代に生えていたものである可能性が高い。



立木根

遺物

検出遺構が少ないこともあり、包含層からの出土がほとんどである。遺物の多くは土師器片で、ややまとまった状態で出土するものは包含層上面から5～10cmほどの深さのものが多い。それより深くなると遺物の出土が希薄となるが、地山層に近い深さで弥生土器片や石鏃、石錐、凹石などの石器類が出土する地点もあった。他には管玉、棗玉といった玉類も出土している。包含層の上の砂や、包含層の上層からは内面黒色の土師器片や、須恵器片、珠洲焼片も少量出土したが、流れ込んだ可能性が高い。



甕

弥生土器 一括で出土したものはほとんどなく、Ⅱ区やⅥAでやや大きな破片が出土しているが、器形を推定できるものは少ない。出土土器片で多くみられるのは天王山式系と山草荷式系であるが、櫛描文を施す土器片も出土している。

土師器 古墳時代前期のものが多く、出土遺物の大半を占めている。また、古墳時代後期とみられる内面黒色処理の坏類が包含層上面で砂の中から少量出土した。

古墳時代前期の土師器の器種は、甕、壺、高坏、器台、鉢、蓋などがあり、また、ミニチュア土器や手握ね土器も出土している。地元の北陸北東系の土師器が主体だが、東海系、近江系のものも少量ある。それらは胎土から、搬入品ではなく模倣品とみられる。



壺

包含層における出土状況は、一括土器としてのまとまりのある状態で出土するものと、接合の可能性が薄い土師器片がややまとまった状態で出土するものがある。また、それらと明らかに出土量が希薄な範囲とがほぼ同一レベルにみられるが、人為的なものによる偏りであるかは不明である。



器台

遺構からの出土では、ピットや土器溜まり（溝状遺構）からの出土のほかに、方形周溝状遺構の特に東の周溝で土師器片が集中して出土した。周溝出土のものは細片が多く、破碎による廃棄も考慮に入れる必要がある。平坦部出土の土師器は、周溝出土のものとはまとまりがあり復元が可能なものもある。また、周溝から竹管状工具による円形の施文がある口縁部の一部が出土したが、頸部から下を欠いており、復元はできない。



方形周溝状遺構周溝の状況

石器 石器の多くは土師器がまとまって出土する高さより低いところや地山漸移層近くでの出土である。石鏃4点（第6図12・13）、石錐1点、石錘1点が出土している。また、凹石の可能性のある礫や、微細な剥離をもつスクレーパーのような剥片なども出土している。

さらに、土師器片が多く出土するレベルよりもやや高い位置の包含層で砥石（第6図18）が出土している。

玉類 管玉4点(第6図14・15)、棗玉1点(同図16)が出土した。管玉は、1点は表採であるが、残る3点は方形周溝状遺構とその周辺からの出土で、北の周溝覆土から1点、平坦部の立木根No.19の下のピットから1点、南の周溝外の包含層(VB-10e)から1点出土した。いずれも緑色凝灰岩製である。棗玉は、ⅡB-7aの土師器片が出土する深さで出土した。めのう製である。



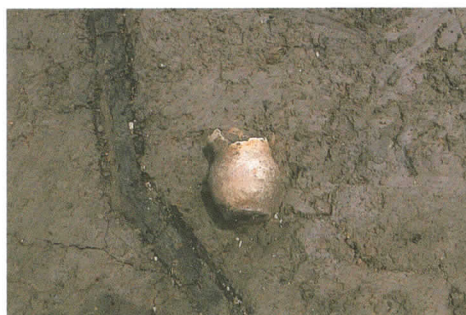
石鏃

炭化米 VC-3aにおいて、朱塗りの高坏脚部や鉢(第6図4)の破片がややまとまって出土し、精査中、その周辺で炭化米が少量確認された。粘性の強い泥炭のような土の中からの出土のため、発掘による検出は困難であり、周辺の土を水洗し、炭化米の検出を行った。その結果、高坏の周辺の半径約1.5m内の範囲の土から合計約1,150粒の炭化米を、また、炭化した数粒の植物の種も検出した。その範囲より外の土も水洗を行ったが、炭化米などは検出されなかった。また、土師器片が多く出土するレベルよりも深い包含層の土は粘性が更に強く、その土からも炭化米は検出されなかった。炭化米と周辺出土土師器との関係は不明である。



炭化米出土地周辺

植物遺体・昆虫遺体 包含層において土師器片などと変わらないレベルからオニグルミの殻、広葉樹の葉などの植物遺体や、甲虫類の羽根などの昆虫遺体を検出した。包含層の土の粘性が強く、また、沖積地で地中の水分量が多かったため、立木根なども含めた植物遺体や昆虫遺体をはじめとする有機物が良好に遺存していたものとみられる。



ミニチュア土器

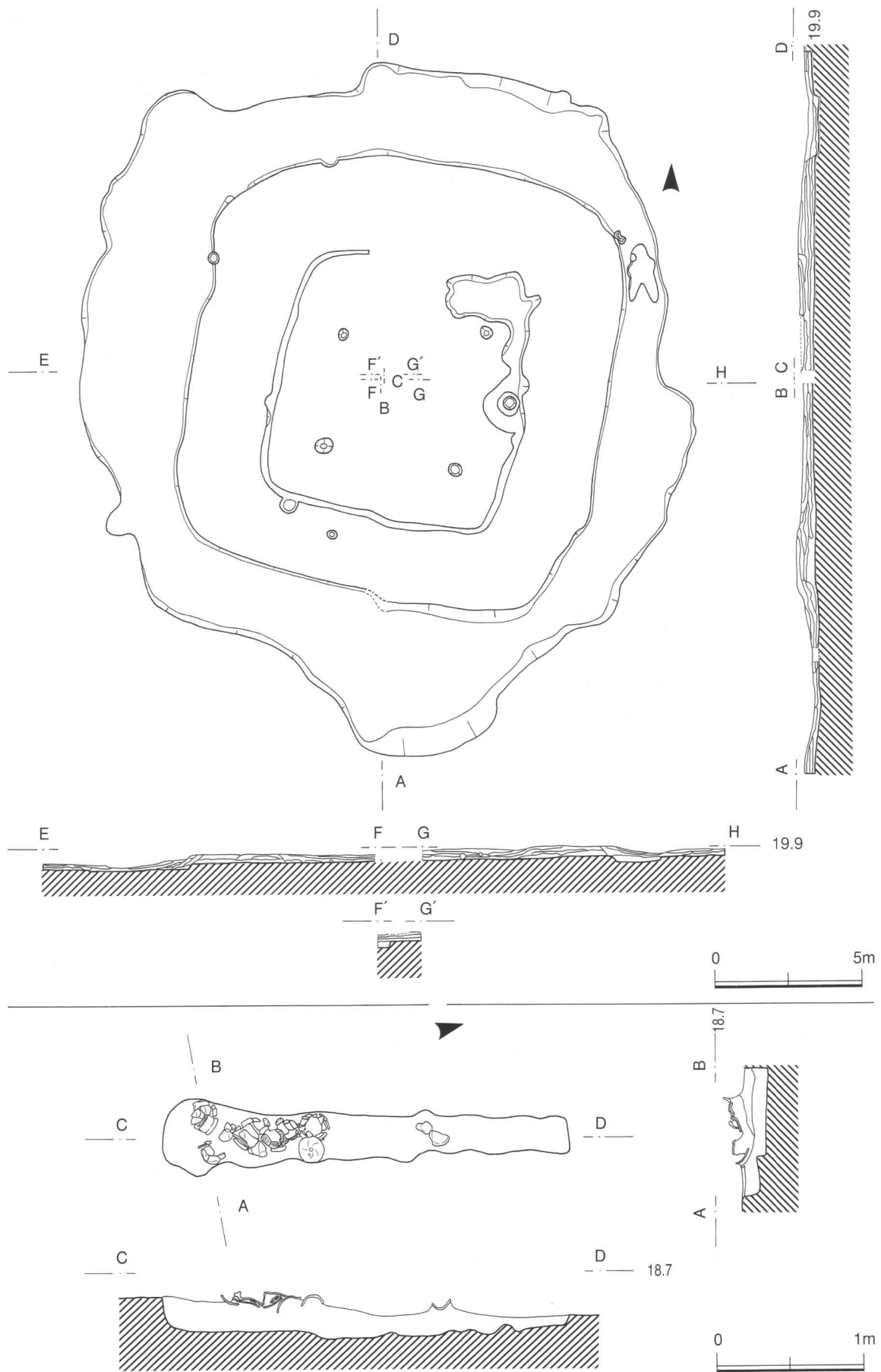
その他 土錘2点(第6図17)が土師器片などと同じ深さから出土している。ほかに、須恵器片、珠洲焼片、青磁片が、表土剥ぎの際などに砂の中から出土している。



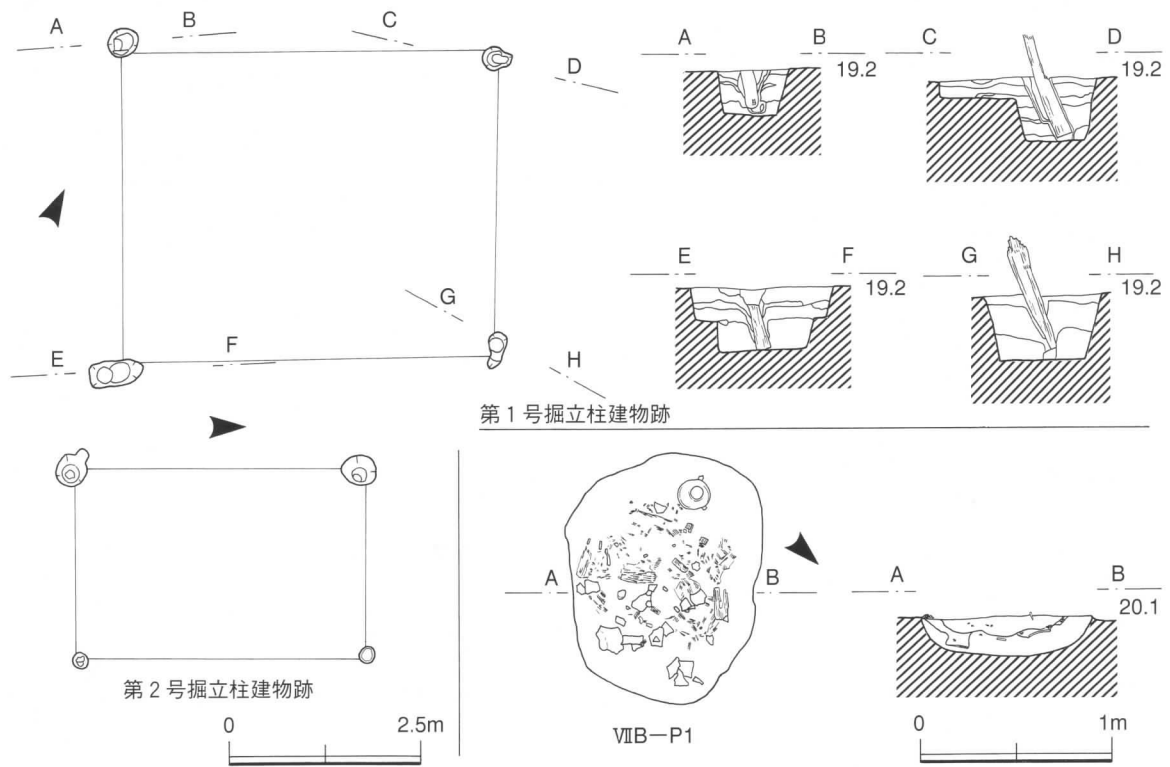
石器・玉類・土錘・砥石



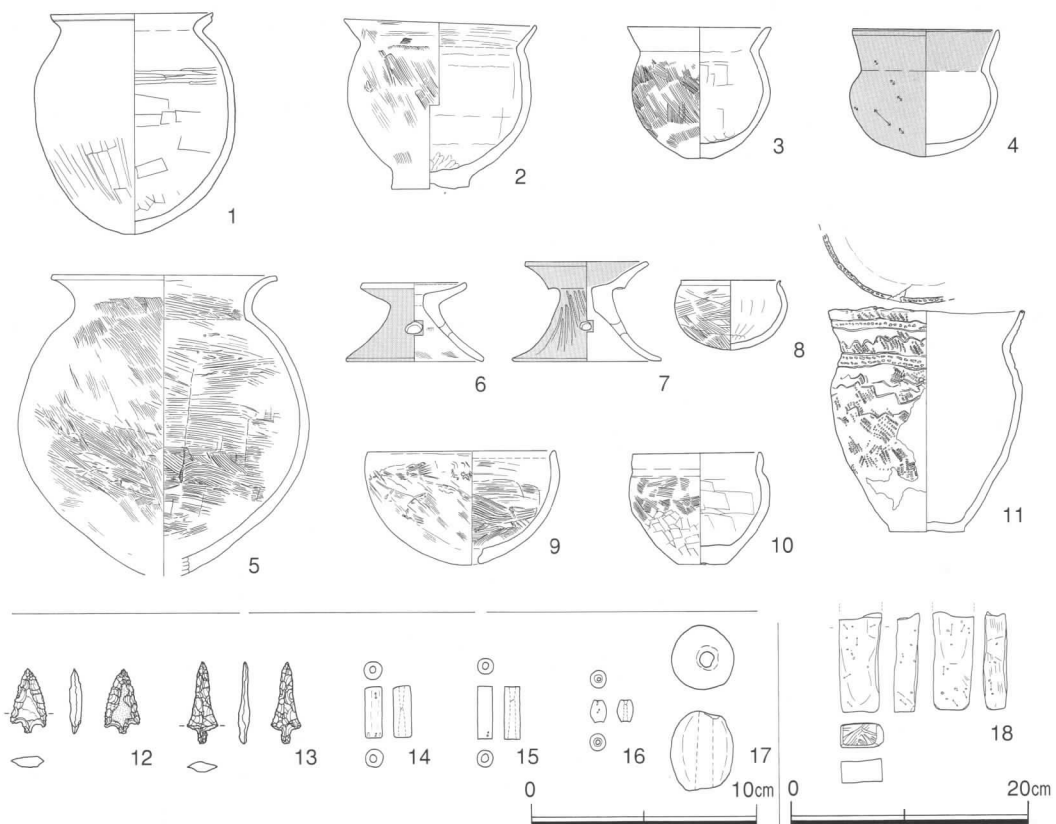
土器



第4図 方形周溝状遺構・土器溜まり実測図



第5图 掘立柱建物跡・ⅦB-P1実測図



第6图 出土遺物実測図

報 告 書 抄 録

ふりがな	ごとだいせき							
書名	五斗田遺跡							
副書名	発掘調査概報							
巻次数								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	鳥居美栄・駒形敏朗							
調査機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2-1 電話番号 0258-32-0546							
発行年月日	2000年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ごとだいせき 五斗田遺跡	ながおかし かめざきまち あざごとだ 長岡市 亀崎町 字五斗田	15202	0	37°29'06"	138°55'40"	1999年 5月25日～ 11月10日	5.400	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
五斗田遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代前期	方形周溝状遺構	1基	弥生土器	40kg	弥生時代から古墳 時代にかけてと思 われる立木の根及 び倒木が出土	
			掘立柱建物跡	2棟	土師器	300kg		
			土器溜まり	1基	甕玉	1点		
					管玉	4点		
					石鏃	4点		
					土錘	2点		
					石錐	1点		
					石錘	1点		

五斗田遺跡

—発掘調査概報—

平成12年3月24日印刷
発行：長岡市教育委員会

平成12年3月27日発行
印刷：第一印刷所